

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その4）

武の道は 和の道究め 和を求む道

出典・・・大塚博紀の道歌（その1）

1 空手と人々との出会い

(1) 知る

私が空手（古い時代の通称「空手」と表記する）の話をも最初に聞いたのは、父・飛鳥恵太郎（1911～81年）からで、小学校2年生のころだったと思う。

父は山形商業学校（現・山形商業高等学校。在学は1924～29年）の柔道部主将だったとき、指導を受けたことのある山形市宮町出身の著名な柔道家、昭和5年の全日本柔道選手権大会（現・全日本選手権大会）優勝者で、後に講道館九段となる尾形源治氏（1892～1974年）から聞いたと語った。

尾形氏は、『大正11年（1922年）夏頃、講道館館長・嘉納治五郎先生から指名を受け、沖縄県出身の富名腰義珍（1868～1957年、松濤館流開祖。後に船越と改姓、以下「船越師」と記す）から空手の手ほどきを受けた』と、空手の形を見せてくれたという。加えて、空手とは一撃で相手を倒せる鍛えた胼胝（たこ）だらけの拳足を持ち、日本武道に類を見ない奇妙な攻防技を使う琉球の秘技であるという。私は、得体のしれない妖術のような印象さえ抱き、機会があれば一度見みたいものと思っていた。

(2) 見る

初めて空手を見たのは、新庄北高等学校3年生（昭和28年）の7月20日前後の土曜日で、その日は1学期の終業式の日であった。午後、体操場（今なら体育館）で拓殖大学空手部の実演会があるので、希望者は残って見学するようにと校内放送があった。大勢の生徒と一緒に立ち見で見学した。

移動基本から形、投げ技も伴う組手（約束組手）と進んで、最後の板や瓦の試割には驚いた。父から聞いた話は本当だった思うとともに、当時柔道部員だった私は、生

涯続けるならこの武道がいいなと思った。

演武者の中には、若きOBで後に中山正敏氏（1913～87年）の後を継いで（社）日本空手協会主席師範となる庄司 寛氏（尾花沢市生まれ山形市出身、故人）や、国際松濤館流館長となる金澤弘和氏（岩手県宮古市出身）をはじめ、錚々たるメンバーが揃っていた。

この頃は、全日本学生空手道連盟結成間もない時期で、中山氏を中心に学連の試合規定草案作成を兼ねて宮城県松島町で合宿練習を行い、その打ち上げ後に新庄北高出身部員の親からの要請で訪れたと後に知った。

終了後、空手のことを尋ねたいと恐る恐る近寄れば、話し相手になってくれたのが庄司氏であった。話が進む内に『体格も好いようだし、拓殖大学で空手をやらないか』と入学勧誘を受け、それまでの訓練や練習法と連絡先を知らされた。教えられたとおり、早速「巻藁」鍛錬に取り組み、突き蹴りの真似事に励んだ。

夏休み終了後のこと、高校の屋根瓦葺替えのために積んであった焼瓦を片端から叩き割り、職員室に呼ばれ担任の先生からお目玉を食らった。

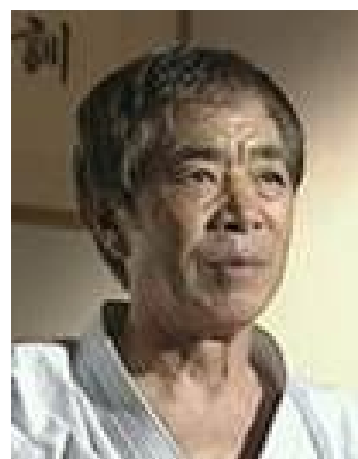
庄司氏とは、『あの時の高校生、飛鳥です』と名乗り往時を語り合ったのは昭和36年6月、第1回東北学生選手権大会の会場で、私も審判員の一人であった。金澤氏とは山梨国体（昭和61年）の前年、会場地の市川大門町で開催県と本県の合同練習時に風呂場で一緒になり、当時のことを思い出していただいた。中山氏は新庄市には来ていないが、第1回世界大会（昭和45年）の前年、仙台市で行われた審判員講習会に講師としてお出でになったのが初対面で、『この人は古武士だ』が第一印象となる。この世界大会で中山氏は審判長を務めている。



中山 正敏氏



庄司 寛氏



金澤 弘和氏

(3) 交流

山形大学に合格したため、拓殖大学に進学しなかった私は、早速空手部に入部し先輩から手ほどきを受けたが、当時の山大空手部は未だ発展途上にあつた。翌年春休み

で帰省中、神奈川大学に進学していた高校の先輩から、『空手部に友人がいる。交流できるよう話してあげようか』と声を掛けられ、早速部の先輩に連絡したところ、話を進めていいと指示が出た。依頼した結果、5月春合宿に神奈川大学空手部から吉岡福夫主将（秋田県出身）と小林孝平副主将（福島県出身）の指導が決まった。

合宿が終わって、再度の交流指導をお願いしたところ、吉岡氏から『和道会総本部に連絡をしておくので、正規な団体として加盟手続きなど考えてはどうか』と勧められたので一任した。

(4) 接点

吉岡氏の計らいで、9月初め総本部事務局長の石塚 彰氏（東京大学卒で当時四段、新潟県佐渡町出身、現・和道会副会長）から来形いただき指導を受け、昇級審査も行った。石塚氏の寄稿文（平成11年6月発刊。「山形大学空手部五十年の歩み」）がある。

昭和30年の夏、神奈川大学から本部への連絡で山形大学に空手部があり、和道流をやっているらしい。是非きちんとした指導をやって欲しい、という相談があり、11月の昇段審査前に本部として指導者を派遣しようとなり、私が指名された（大塚先生は各大学の指導で、どうしても地方に行く時間が取れなかった）。これが山形大学空手道部と私との接点である。昭和30年の秋（月日は不明）夜行列車に揺られ、翌朝、古びた山形駅に着いた。（原文のまま）

その後、石塚氏は10月にも訪れており、単独で、又和道流開祖の大塚博紀最高師範（以下、「大塚先生」と記す）のお供で数回山形大学の指導に訪れており、今も懇意にいただきご指導を得ている。

(5) 出会い



大塚博紀先生

同年11月20日過ぎ、同期の安孫子 孝君、梶山紀之君と私の3名は昇段審査受審のため上京し、神奈川大学空手部道場で最後の調整練習を行うが、初めて大塚先生と念願の出会いが叶い、直接指導を受けた。

私が空手を志して2年4か月余り、偉大なる武道家であり、生涯の師となるお方との初対面は、後の項で詳しく触れよう思う。当時大塚先生は63歳であった。

2 道歌とは

広辞苑によれば「道徳、訓戒の意を、わかりやすく詠んだ短歌。仏教や心学の精神を詠んだ教訓歌」とある。著名な宗教家や思想家などの他に、武道関係者の作となる道歌も多く残されており、現代においてなお人生訓として活かされている。

短歌は和歌という表現を使うこともある。ただし、和歌は五・七・五・七・七の五句の歌体だけでなく、同じ五・七の韻律を基調としながら、長歌、旋頭歌、仏足石歌体などがあって、古くは「古事記」「日本書紀」に多く見られるのがそれである。中でも、スサノヲノミコトが詠んだ『やくもたつ いづもやへがき つまごみに やへがきつくるそのやへがきを』が和歌の始まりとされているが、「スサノヲノミコト」は神話上の人物であり、これは当然後世の作である。和歌に関して、2月の「ワンポイントレッスン」コーナーで「ヤマトタケル」の歌「・・・倭し麗し」を取り上げているので思い起こしていただきたい。

和歌の呼び名は中国の漢詩に対する大和歌を意味し、倭歌と表記することもある。和歌は、「万葉集」になると記紀の時代よりも現実味を帯びてくる。

したがって、短歌は和歌の一形式として五・七・五・七・七の歌体となる。短歌は、貴族や上流階級の嗜みとされ、その巧みさを称賛された人たちの物語は多い。今に至り宮中「歌会始め」の行事は、催事として最たる伝統である。後には、俳句へと発展の道筋を敷くことになる。

大塚先生の著書「空手道」には、二つの道歌が掲載されている。

『武の道は ただあら事と な思いそ 和の道究め 和を求む道』

『武の業は 宇宙の如く 無限にて 業に極致は なきものと知れ』

3 大塚先生と武歴

(1) 生い立ちと柔術

大塚先生は、明治25年(1892年)6月1日、茨城県下館市に医師・大塚徳次郎の長男として生まれ、本名は孝(たかし)である。武家の仕来りから数え年6歳の「武術始め」をもって、母方の大叔父・土浦藩武術師範の江橋長次郎から、幕末の水戸藩士・江畑空衛門を始祖とする為我流(いがりゅう)柔術を学んだ。

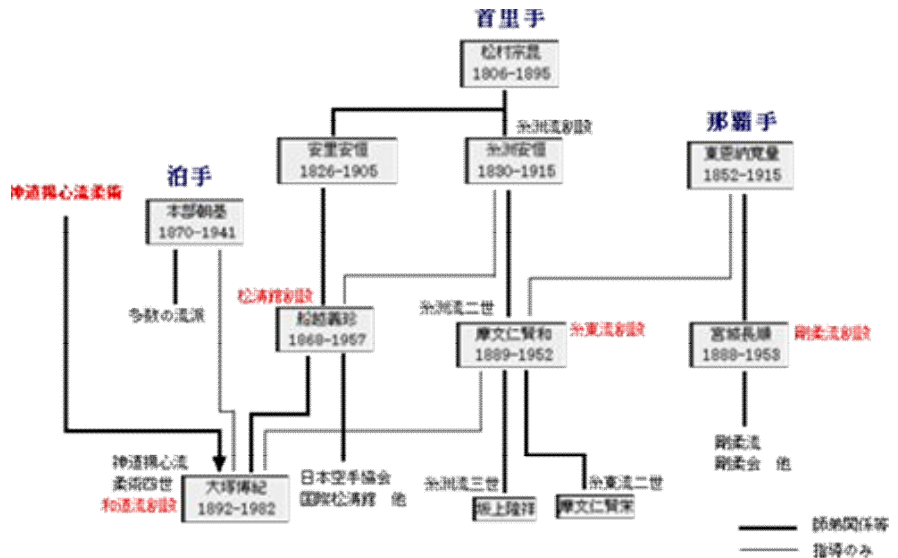
その後、茨城県立下妻中学校(旧制)に入学すると、剣術師範を兼ねていた神道揚心流柔術(幕末の頃、松岡克之助を始祖とする)第三世中山辰三郎宗家から神道揚心流柔術を学んだ。

明治43年(1910年)早稲田大学専門部商業学科に入学、卒業後は川崎銀行に勤務しながら柔術を継続、特に「活殺法」と「当身術」の研究に精励している。

川崎銀行は程なく退職、接骨院を開業しながら柔術に専念する。大正10年(1921年)6月、中山辰三郎宗家から神道揚心流免許皆伝を允許され、神道揚心流第四世を継承する。

(2) 大塚先生と空手

大正 11 年 6 月、東京都で開催された第 1 回体育展覧会において、沖縄県人の船越義珍師が沖縄唐手術（当時の呼び名）の形を演武し、その後、展覧会事実上の責任者であった講道館館長嘉納治五郎氏に請われ講道館で空手を指導し、他にも警視庁などから要請されてこれに応じ、文京区水道橋にあった沖縄県人学生寮「明正塾」に留まって指導を継続することになる。



大塚博紀先生の空手道系譜

この話を耳にした大塚先生は、7月末「明正塾」に船越師を訪ねたところ、

『私は唐手の形を 15 ほど持ってきた。素人なら 5 年、武術の心得がある者なら 2 年もあれば大部分の形を習得することできるであろう』と語ったという。

元来「当身術」に造詣が深かった大塚先生は、説明を聞いて直ぐ理解し、その技法に魅力を感じて入門を決意した。

以後、毎日欠かさず「明正塾」に通い指導を受けたという。程なく稽古が進み、船越師が大学などの指導に赴くとき師範代として同行するようになる。

船越師の他に、昭和 3 年には摩文仁賢和師（1889～1952 年、糸東流開祖）から、翌 4 年には本部朝基師（1890～1940 年）から形を学ぶ。形だけでなく組手も重視する本部師から影響を受けるところ大きかったと語っている。本部師に師事したころから一層組手試合の研究を進めた結果、もっぱら形稽古を重視する船越師との間に不和が募ったといわれる。

この頃から独自の活動も多くなるが、昭和 6 年（1931 年）、柳生新陰流・久保義八郎の道場を借りて指導を開始し、自らも同流剣術を学び、他にも、「日本古武道振興会」の活動を通し、富田流小太刀に得るところ多かったとされている。昭和 9 年秋に、空手道に柔術や他武術の特徴を加味して独自の技法体系を完成させ、同年「大日本古武道振興会」の発足を機に、「大日本空手道振興倶楽部」の名称で加盟し、一流派として独立した。

昭和 9 年（1934 年）大日本空手道振興倶楽部設立し、事実上、和道流の発足となる。

昭和 13 年 (1938 年)	大日本武徳会から錬士号を授与され、流派名を神州和道流空手術とした。
昭和 17 年 (1942 年)	大日本武徳会から達士号 (現在の教士号) 授与される。
昭和 19 年 (1944 年)	大日本武徳会から「空手道主席師範」の任命を受ける。
昭和 41 年 (1966 年)	勲五等双光旭日章受章する。
昭和 44 年 (1969 年)	財団法人・全日本空手道連盟発足と同時に副会長に就任。
昭和 47 年 (1972 年)	国際武道連盟総裁、東久邇稔彦殿下から名人・十段位を授与 (初の称号段位授与で、柔道の三船久三、剣道の中山博道と三名) される。
昭和 57 年 (1982 年)	東京都練馬区三原台の自宅で、享年 91 歳 (満年齢 89 歳) をもって永眠される。

大塚先生との出会いから

(1) 初指導

1 の(4)で書いたように、大塚先生と最初の出会いは、初段試験受審で上京した昭和 30 年 11 月末であった。所は神奈川大学 (横浜市神奈川区六角橋) の空手部道場で、5 月に交流指導を受けた同大学の吉岡主将から、審査に当たり事前練習を一緒にしてはと誘われていたからである。

審査 5 日前に上京した私たち三人は、山形大学を 1 年で中退し明治大学に進学していた河合君 (卒業後は山形新聞記者、故人) という友人が住む銀座裏の間借り部屋に転がり込み、到着翌日は明治大学空手部の練習風景を見学した。

いよいよ意を決し神奈川大学に行く。大勢の部員による厳しい稽古の雰囲気には驚きながら頑張っているところに、やがて大塚先生が現れ、一同の練習は中止された。吉岡主将から山形大学の三人が加わっていると一人ずつ大塚先生に引き合わされ、『折を見て山形にも指導に行きたい』とお言葉をいただき、ドギマギしながら一礼したのを思い出す。

身長は 165 センチ位 (明治時代中期の生まれなら背は高い方)、中肉の柔和な物腰の姿は、山形辺りではあまり目にしない目元が日本人離れした容貌で、確かに美男に相違なかった。

大塚先生の指導で同大学部員ともども練習を続けたが、初めて体験する懇切な指導に感激したのは勿論、日本一の先生に出会えた喜びで一杯であった。

1 時間半ほどで大塚先生はお帰りになられた。古参部員の話では、『最高師範の時は練習が楽でいいな』であった。先生が説明している間は姿勢さえ保っていればいい訳で、身体は休んでいられる、成るほどと思った。その後も上級生の指揮でたっぷり練習は続いた。

翌日と二日間お世話になり、11 月 27 日東京農業大学空手部道場で行われた審査会で、3 名ともに東北地区の大学生で初の和道会初段合格者となることできた。

(2) 来形指導など

初対面が叶った翌年6月、大塚先生お一人で指導に向かわれると石塚氏から連絡が入り、その日程に合わせて合宿練習を設定した。同期の井上俊夫君（元殖産銀行の支店長、故人）が仙山線の山寺駅まで出迎えに行くと名乗り出た。井上君は大塚先生と面識がないし写真さえ見ていないので無理だろうと訝ったが、彼は『行けば分かるさ』とばかり平然としている。無事役割を果たし、大塚先生を伴い帰ってきた井上君は『並居る乗客の中で、即座に先生はこの人だと確信して、大塚先生ですかと声を掛けたよ』とうそぶいた。

初来形の際は七日町の丹野旅館（現・七日町二郵便局近辺）にお泊まりいただいたが、次回から上山市十日町「島津旅館」（旧・上山宿本陣）を定宿とした。

県内では、山形大学のみならず村山市の佐藤敏男氏（現・東京歯科大卒、村山市佐藤歯科医院。和道流村山支部創始者、昭和58年没）のところにもお立ち寄りになられていた。ただし、大塚先生の高弟の一人である酒田市の加藤俊夫氏（現・東京医科大卒、酒田市加藤外科医院。平成元年没）は当時空手の活動をしていなかったため行き来はなかったようで、私たちも加藤氏の存在を知ったのは後年になってからである。

佐藤氏は県連盟発足時（昭和40年）から、加藤氏は昭和48年から山形県空手道連盟副会長として県連発展に寄与されている。加藤氏の場合、初代の（財）全空連東北地区協議会議長（私は三代目）を昭和52年から亡くなるまで務められた。お二人とも、太平洋戦争前の医学生時代に、大塚先生からご指導を受けた貴重な存在といえる。

沖縄県出身の仲宗根源和氏（1895～1978年）の編著になる、昭和13年（1938年）発刊の「空手道大観」（東京図書出版株）という発行数がたった200部という、空手道資料として第一級の貴重本がある。

この中に、大塚先生と加藤俊夫氏が演じている「短刀捕表七本の形」の写真50枚と、30頁に及ぶ解説文が掲載されており、その中から3葉の写真をご覧いただこうと思う。この写真から、お二人ともに付け入る隙のない立派な技芸（本物）と確言できる。

なお、解説文の中に次の記載があるので、武道本来の仕来りを承知していただきたい。この場合、「受身」は「仕方」ともいって技を先に仕掛ける側、「捕身」は「捕方」ともいって仕掛けられた技を制して処する側を言う。

短刀捕	表七本の形	大塚博紀
方式並に禮式		
受身と捕身		
形を行ふ場合、師範或いは上位の者受身をなすを通例とする。捕身は下位の者がなすを禮儀とす。（原文のまま）		

受身～大塚博紀先生

捕身～加藤俊夫氏



(2) 真剣白刃取り

大塚先生の「真剣白刃取り」は、日本武道界で比類ない極め付きの技で、他種武道関係者からも称賛されていた。

私が大学3年を終わろうとする頃、山形大学空手部が上山小学校を借りて春季合宿練習を行った際に、大塚先生がお出でになっていた。御礼に全校生徒に空手の演武を披露することになり、先ず私たちの演武が終わった。続いて、先生は護身術を披露して説明し後、小学生を前に同行の石塚氏を相手にして「真剣白刃取り」を行われたのには驚いた。

見ていた先生方と児童は、身じろぎもせず、真正なる武道の精髓に引き込まれるごとく凝視する姿を見た。

私たちなら、幾ら言葉を尽くしても決して伝えることできない、大塚先生の語らずとも会場を包み込む教育力の底力を垣間見たのであった。

その後何度も先生の「真剣白刃取り」拝見しているが、この時の出来栄えが最も印象に残る名人芸だったと思っている。独擅場(どくせんじょう)、至高の業であった。



大塚博紀先生の真剣白刃取り

(3) 和道空手の奥深さ

大塚先生とご一緒のときは、誰もが全てを聞き漏らすまいと必死だった。先月のワンポイントレッスンで「世尊拈華 迦葉微笑」と題して「大梵天王問仏決疑經」から

述べたが、その中の5で『一を聞いて十を知る気概』と提言した。そんな気持ち日頃の指導を受ければ上達も早かろうと伝えたかったのである。

ところが、私は、34歳で第1回世界大会の審判員に選ばれ、35歳で崇武館を設立して自分の城を持った。そして、40歳を過ぎたころに『ようやく大塚先生の空手理論が分かってきた。自分も同じように和道空手を指導できる』と思うようになったが、この考えは正に凡夫の浅ましき、甚だしい思い上がりであった。

大塚先生とお会いするたびに新たな発見というより、技法論法ばかりでなく精神を啓発され視野を開かされる思いで、自分の思考と身体操作技法とは大きく掛け離れている存在を思い知らされるばかりであった。

昭和56年先生は亡くなられたが、死後ようやく天才的な武道感覚の持ち主であったと気付くのである。

『一を聞いて十を知る』程度では、大塚先生の空手を理解すること不可能なのである。そればかりか、先生の空手の中には明治の香が漂っていた。

(4) 思い出すことなど

大塚先生の技法特徴は、受技の強烈さだった。これは本当に『空手に先手なし』を示唆していると思う。

また、和道空手は腰が高いのではとよくいわれるが、70歳を過ぎても腰を極めた「突き」はスピードも豊かで強かった。先生の空手は腰が高いのではなく、その高さでも完全な技を使いこなせたということで、その辺りを誤解しない方がよい。

また、著書「空手道」は、空手道界の過去現在を通して類を見ない、緻密かつ精緻を極めた内容で貫かれている。その中から感じ取れることは、深い教養と柔術修業、接骨師としての専門知識、空手道修業実践に基づいて説く指導論で満ちており、虚飾や空論は一か処もないのである。



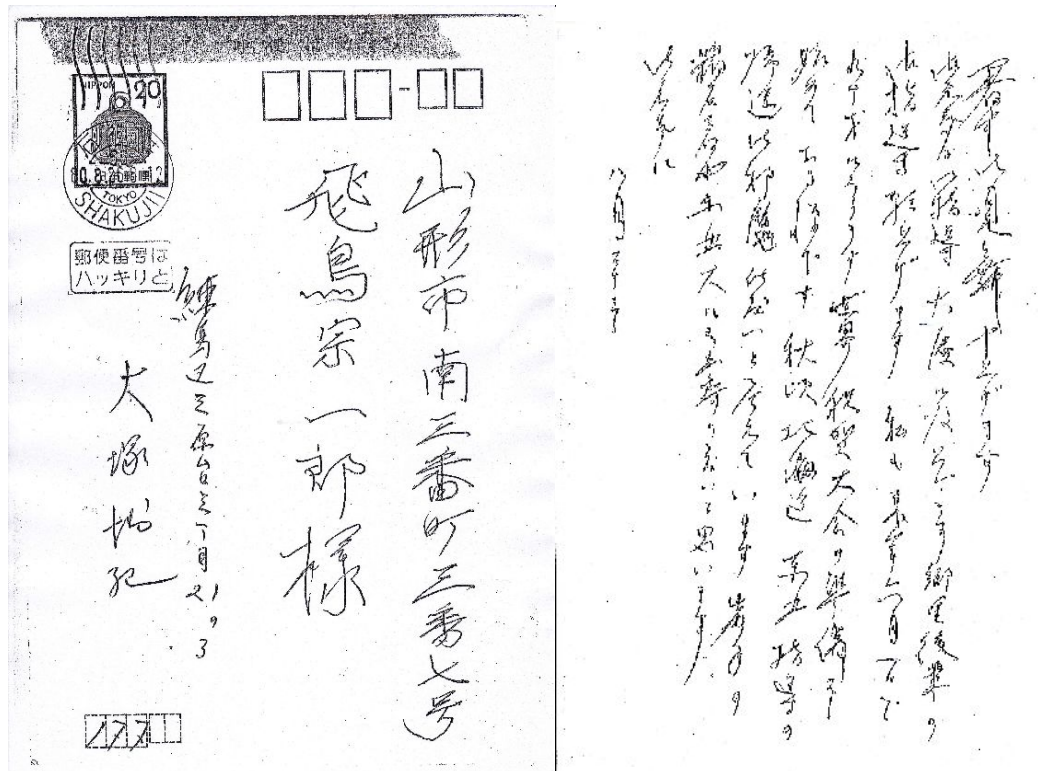
晩年の大塚先生

私は、この著書を和道空手の聖典だと思っている。それ由に、真意を理解できず勝手な解釈で歪曲することを嫌う。和道流空手道を志すなら、大塚先生の言葉を一言一句遵守しなければならないのは当然のことである。

最晩年まで地方への普及指導に意を注がれていた大塚先生だったが、亡くなられる前年の春に仙台市の昇段審査会にお出でになられた。帰途、私が仙台駅までの見送りにお伴した。その時、駅の改札口の近くで乗車券が見当たらずあちこちと探す姿に一抹の寂しさを感じたが、どうなる事やらと見守るうち、5分以上も過ぎてようやくポケットの一つから見つかり、安堵の胸をなでおろした。まだ若かった私だったが、自分もいずれこのような時期が訪れるであろうとの思いが脳裡を掠めた。

亡くなる前年に二度お葉書をいただいている。この中から8月の分を次に掲載する。このお葉書に対し直ぐ返事を出した。『遠路のところお難儀でしょうが是非お越しく下さい。私の道場で大学生と門弟と一緒にご指導ください。そして、近くの温泉にごゆっくりお泊まりいただき、お身体をお勞わりくださるようお待ちしております』と。

その後、連絡が途絶えたので、10月になってお電話したところ、ご子息の次郎氏(二代目宗家、博紀氏)が電話口に出られ、『父は何処が悪いというわけでもないが、この頃伏せております』とのことであつた。



暑中お見舞い申し上げます。
御元気に御指導、大慶に存上げ
ます。郷里後輩のご指導願上げ
ます。私も、来年六月一日で九
十歳になります。世界祝賀大会
の準備を始めておる様です。秋
頃、北海道、東北指導の帰途に
御邪魔仕度いと考えています。
岩手の箱石君や東北大にも立ち
寄り度いと思ひます。御元気に。
八月二十三日
(句読点は筆者)

(5) 大塚先生の死と中央技術本部の発足

大塚先生は私が46歳の時、1月29日ご永眠された。ご葬儀は東京都港区の「青山葬儀場」において神式により厳かに執り行われ、私も参列した。残念なことに亡くなる直前に、「全日本空手道連盟和道会」と「和道流空手道連盟」と組織が二分した。ご霊前への献花など、私は最後まで残り別れを惜しみご冥福を祈った。

大塚先生ご存命中は、先生の裁定が絶対で他言差し挟む余地なかったのに、その柱を失った。ここに、和道会として集団指導体制を選択した。

亡くなられた翌57年6月（1982年）、和道会は「中央技術本部」を設置し、私も本部員の一人に選任された。

ご生前は、六段以上の高段者は大塚先生の推挙によって決定されていた。「中央技術本部」はこの取り扱いについて、六段位以上の高段位も実技審査を行い、推薦昇段と二本立てにすると決め、昭和58年度からスタートすることになった。

(6) 八段位の受審

私は、第1回目（昭和58年度）となる昭和59年3月28日の審査を受審して合格し、48歳4か月で実技八段位第1号となった。

合格通知とともに、審査委員長の丹羽峻一氏（初代中央技術本部長、故人）から便箋8枚に及ぶ書簡が添えられていた。

その内容は、八段位を持つ7名の審査員全員の評価内容と、今後留意すべき事柄、そして合格に至った判断の要諦は『和道空手を具現しているかどうか』であったと書かれていた。私の空手がどの程度『和道らしさ』として判断されたか詳らかでないが、自省するとき正直空恐ろしい戦慄が走った。

なお、崇武館師範代の一人である横山 弘氏は、同じく実技六段位の合格第1号となった。この日の受審者の中で合格したのは、私と横山氏の二人だけである。

昭和58年度、最初の高段位実技審査にあたり、もし私の誕生日11月4日以前に実施されていれば、48歳以上という年齢制限によって受審できなかったのである。これは運命的なものと思う。その後、次の合格者が出るのは5年後のこととなる。

私が合格した原因として、次の二つがあると思っている。

一つには、大塚先生亡き後、和道流空手道の技法統一の方向性は、中央技術本部員でなければ分からなかった。この統一技法に合致しなければ、合格は不可能と思う。

二つには、受審を決めてから、横山氏とともに前年の12月初旬から練習を始めた。受審前日までの百日余り、道場の一般練習が終わった後11時まで、二人きりの稽古に取り組んだ。受審日を迎え、体調は絶好調どころか身体中はぼろぼろ、満身創痕の状態ながら目標達成までは決して挫けない、「不撓不屈」の精神で臨んだのが幸いしたと思う。横山師範代に対する感謝の気持ちは生涯忘れないつもりでいる

特に、私は1か月ほど前に痛めていた右太腿裏の肉離れが受審中に再発し、強烈な痛みが走った。『山形に帰れば、医者がいるさ』と心頭滅却してやり抜き、足を引きず

り帰途に着き、診察の結果2週間のギブス固定となった。

私は、大塚先生と出会えて良かったと心から思っている。他の先生だったらここまで続けられたかどうか分からない。

それに、この八段位への挑戦は私の空手人生を変えた。

(つづく)